

堀江 珠喜 著『サロメと世紀末都市 —ワイルドに於ける悪の系譜』(大阪教育図書)

『ワイルドの時代—世紀末風俗雑話—』(JCA 出版)

Beyond Wilde

西村 孝次

すごいですねえ—と所ジョージふうにいわずとも、とにかく『ワイルドの時代』につづいて『世紀末御伽草紙』、さらに『サロメと世紀末都市』と、ここ二年あまりの堀江珠喜さんのお仕事ぶりたるや、まことに、すごいですねえ、と感嘆するほかはない。

わたしたちの協会は会長の井村君江さんをはじめ、樋口陽子さん、それに堀江さんと、みめうるわしく才たけた研究者ぞろいである。たまたま国際婦人年ということとも重ね合わせて考えてみると、これにもまして喜ばしいことがあるだろうか？

さて、この堀江さんの最近著『サロメと世紀末—ワイルドに於ける悪の系譜』については、すでに井村さんが『英語青年』2月号において情理かね備えた書評を書いておられる。この評論の関するかぎり、わたしとしてはほとんど加えるべき言葉をもたない。ただ、ここでは、これを含めて他の二冊とも視野のうちに入れながら、わたしの目に映ったところをいささか語ることにしたいと思う。

オスカー・ワイルドは人および作家としてわたしたちにとって語りやすい。というよりも語りたい。かれという人物、かれの藝術思想のリズムは、われわれをして愉しく放埒に諷刺的に語りたいた欲望をかきたてずにはおかない。それほど魅力に溢れているからである。そして、これまで、じつに多くの、いや、あまりにも多くのことが語られてきた。おそろく、これからも、いよいよ多くのことが語られるであろう。

しかし、じつと耳を澄まして聴きると、それらは「取巻き」のささやくような贅辞でなければ「敵」のかまびすしい悪口が多い。これはかれにとって一見いかにも不幸と思えなくもないが、ほんとうはむしろ幸福な存在証明または住民票なのであって、もしかれという男が取巻きをひきつれてロンドンやパリの紅灯の巷に出没しなかったら、もしくはそのいかがわしい路地で敵の待ち伏せをうけて袋叩きにあわなかったら、かれはもはやワイルドではなかったであろう。'A man of some importance' は時の古今・洋の東西を問わず必ずといってよいほどこんな目にあう。こんな目にあうから 'important' なのでない。'important' だからこそ、こんな目にあうのである。

ところで、わたしは刺身が好きで、これさえあれば酒も飯もうまい。それなのに、ちかごろはだんだん刺身が生臭くなってきて、あれほど好物だった鮭の刺身が鼻につくように

なり、どうしてもほしいときは鯛や鱈のにしている。つまり赤身から白身へと嗜好が変わってきたわけで、これはわたしが真正正銘のじじいになったしるしである。そこで、わたしはじじいらしく聞き直して、このグルメの変化を人間への関心から作品への集中へと推移した現われ、と解釈するのである。フローベールが嫌いになるにつれて、『ボヴァリー夫人』が、もしくはフローベールであるところの「ボヴァリー夫人」が好きになる。ダンディであるところのワイルドをではなく、ワイルドのダンディズムと、その文学的表現を愛するようになる。

これに伴って、しだいにわたしはイギリスの世紀末というものを従来とはすこし違った目で見えるようになった。なるほど、あの「世紀末」は十九世紀の終わり十年間だけの現象であって、ジャーナリズムあたりで二十世紀の世紀末が云々されるのはジャーナリストのひとりよがりな話題にすぎない。その意味で、あくまでワイルドを十九世紀の世紀末に限定しようとするのは正しいとして、しかし本来その世紀末というのは、わたしたちの考えているような、または考えたがっているような藝術の季節とは、どこか別なものなのではなからうか？

したがって、わたしの「悪」についての考え方も、おのずから異った調子を帯びるようになる。たとえば、テレビでの松本清張の『わるいやつら』であるが、あれの女主人公・横村隆子(さきに松坂慶子が、こんどは名取裕子が演じる)は、「わるいやつ」だろうか？ファーム・ファタールだろうか？

サロメは隆子である、などというのではない。ヨカナーンの「霊」に敗れる「肉」としてのサロメ—サロメがそんな女なら、わたしにはなんの興味もない。わたしを捉えてはなさないのは、サロメのせりふである。あれは『マタイ伝』の作者には到底書けなかった文字である。あれは、キリスト教の千九百八十五年間にわたる残忍な圧力をもってしても、いまなおついに圧殺しえないひとつの生命の声である。その声を、イエスとかれの末裔につたえたのは、ワイルドただひとりなのだ。このワイルドの 'voice' を、アーサー・シモンズへ、ついで W.B.イェーツへとたどるならば、そこにワイルドを超える道のひとつが見つかるはずである。

(明治大学名誉教授)

